

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00842

研究課題名（和文）学習者のビデオ映像活用に基づいた韓国語プログラムの評価研究

研究課題名（英文）Evaluation Study for Korean as a Foreign Language Program

研究代表者

岡田 靖子（Okada, Yasuko）

清泉女子大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：40364830

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：当初の目的は、韓国語学習者のスピーチ形式によるパフォーマンスの成果を可視的に検証し、韓国語コースのプログラム評価を実施後、コミュニケーション能力育成を目指した授業構成を検討することであった。しかし、途中で計画を変更する必要が生じたため、本研究は日本人女学生の韓国語学習に対する動機づけや態度を検討することを目的とした。短期大学で韓国語コースに所属している学生を対象に、質問紙調査、インタビュー調査、自由記述を含む4つの調査を実施した。その結果、学習者は自分の意思で韓国語を学習しているが、韓国語への関心を喪失し始めると学習意欲を維持するのが容易でないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究成果の学術的意義は次の3点である。（1）映画鑑賞と対話が、韓国語学習者の韓国の歴史認識に対して新たな知見を与えると同時に、日韓関係を異なる観点から捉える契機になることを示した。（2）短大の韓国語学習者の動機づけは、英語学習者や大学の韓国語学習者のそれとは大きく異なる傾向が見られた。（3）学習者のスピーキング力を育成するため、学習者自身によるスピーチビデオを視聴することの有用性を提案した。本研究の結果は、英語以外の外国語教育における現状や課題を把握するという点で社会的意義が大きい。

研究成果の概要（英文）：This study originally sought to visualize the outcome of speech performances by Japanese learners of Korean as a foreign language and examine the course content aimed at developing communication skills after evaluating the Korean language program. However, as it was necessary to change the schedule halfway through, our research plan changed, and we instead investigated Japanese learners' motivation and attitude toward Korean learning. Participants were female students in the Korean program at a two-year college. Instruments included open-ended questions, rating scales, and interviews. Findings revealed that learners started language learning of their own accord, experienced intercultural contact through media, and eventually had difficulty continuing their Korean studies once they became demotivated to maintain their interest in the language.

研究分野：応用言語学

キーワード：韓国語学習者 動機づけ 異文化理解 ビデオ研究 混合研究法 海外留学 振り返り 円卓シネマ

### 1. 研究開始当初の背景

日本国内で2003年、韓国ドラマ『冬のソナタ』が放送されたのを機に、韓国大衆文化に対する日本人の関心が高まり始めた。(第1次韓流ブーム)。2010年から2011年頃には、KARAなどのK-POP歌手が流行し(第2次韓流ブーム)、2017年には第3次韓流ブームが到来した。このファンの多くには女子学生が含まれており、その特徴は韓国の化粧品やファッションのほかに韓国語にも興味を示していることである。

国内における韓国語学習への関心の高さを測る手段として、韓国語検定の受験者数の変化が挙げられる。日本人が受験する韓国語検定のなかでも「ハングル能力検定試験」は1993年から実施している。2008年度1回目は全体受験者10,039人のうち10代の受験者は10.7%(1,229人)であったのに対し、2017年度1回目は10代が26.5%(2,259人)を占めるようになり、この10年間で若者の受験者数が2倍近くになった。

日本人の韓国語学習者を対象とした学術的研究は多くない。NII 学術情報ナビゲータ (CiNii) でキーワードに「日本人」「韓国語学習」を入力した結果、検索論文数は24件であった(2018年9月16日現在)。例えば、日本語と韓国語では語彙や文法が類似する点を取り上げ、学習者の語彙習得に関する研究(原、2009)や日本語と韓国語の比較研究(李、2011)などが行われている。一方、両言語では発音方法が異なるという観点から、日本人学習者の韓国語発音を取り上げた研究が多く見られる(権、2011; 姜、2016; 梁、2008)。また、発音を向上させるためには話す練習を必要とするが、授業以外で韓国語を使用する機会が少ないという問題も指摘されている(崔、2018)。

日本における韓国語学習者の現状を把握するためには、高等教育機関において韓国語を専門に学んでいる学習者を対象とした研究に取り組む必要がある。外国語教育においてコミュニケーション能力の育成が必要とされているにもかかわらず、韓国語のスピーキング力の育成に着目した研究がこれまで行われてこなかった。したがって、コミュニケーション能力育成という観点から教育的検証が不可欠であると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究の当初の目的は、短期大学における韓国語学習者のスピーチ発表を縦断的にビデオ撮影し、韓国語学習の成果を可視的に検証すること、韓国語コースのプログラム評価を実施し、コミュニケーション能力の育成を目指した授業構成を検討することの2点であった。しかし、研究代表者がデータを収集していた勤務校を辞したため、縦断的研究の継続が難しくなった。そこで、当初の計画を若干変更し、学習者のスピーチ発表の成果を可視化し検証すること、韓国語を学習している女子学生の特徴を明らかにすることを本研究の目的とした。以下の4つをその柱とする。

- (1) 韓国語学習者の学習動機や動機づけの変化を検証する。
- (2) 韓国語学習者の動機づけに関するモデルを構築する。
- (3) 韓国映画を用いた異文化理解教育を実施する。
- (4) スピーチビデオ活用による学習者への効果を検証する。

### 3. 研究の方法

(1) 韓国語学習者の動機づけ変化: 本調査は、2019年と2020年の2時点において実施され、韓国語を学習している1年生14名が参加した。参加者を留学経験あり群と留学経験なし群に分けて、動機づけや学習態度の変化を検討するために、英語学習者の先行研究(小林、2017)で使用された質問紙の項目を修正し、韓国語学習者用として用いた。参加者の回答は統計分析を行い、両群の違いを検討した。

(2) 韓国語学習者の動機づけモデル: 本調査は2019年に実施され、韓国語を学習している2年生30名が参加した。学習者のモチベーションや態度を検討するため、小林(2017)とTaguchi et al. (2009)を参考にして作成された尺度(岡田ほか、2020)を使用した。参加者からの回答は記述統計と推測統計の両方で分析した。質問紙調査に参加した学生のうち5名から協力を得て、面接調査を実施した。韓国留学未経験者2名、短期留学(2週間程度)経験者1名、長期留学(6か月)経験者2名という内訳であった。半構造化面接を行い、面接はICレコーダで録音された。インタビューはテキスト化し、分析方法には木下(2003、2020)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)と構造構成的質的研究法(西條、2007、2008)の枠組みを採用した。

(3) 円卓シネマによる異文化理解教育: 本調査は2019年に行われ、異なる文化を持つ人々が一緒にお互いの国の映画を鑑賞し、その後の対話を通して文化的背景の相違を受け入れるという異文化理解の試みである「円卓シネマ」(伊藤・山本、2011)を援用した。参加者は韓国語を学習している1年生4名で、韓国映画「国際市場で逢いましょう」を鑑賞し、その後、モデレー

ターとして参加していた研究者2名と対話をした。

映画鑑賞の事前・事後に使用した尺度は、韓国に関する態度尺度（村田ほか、1979）と韓国との接触経験尺度と韓国への関心尺度（稲垣（藤井）、2017）であり、映画鑑賞前または鑑賞後、あるいはいずれか一方で実施した。尺度への回答は記述統計を行った。鑑賞後の対話の音声データはテキスト化し、ワードクラウド分析を実施した。対話に対する自由記述回答はワードクラウド分析と特徴語分析を行った。

（4）韓国語学習者のビデオ活用効果：本調査は2018年から2020年にわたって行われ、韓国語を学習している女子学生16名（1年生10名、2年生6名）が参加した。参加者は韓国語でスピーチを発表し、そのビデオ映像を視聴した後、オンラインで自由記述設問に回答した。この自由記述では、①ビデオ視聴の良い点、②ビデオ視聴の良くない点、③他の学生のビデオを視聴すること、④授業でスピーチ発表をビデオ撮影し、その映像を他の学習者と一緒に振り返ることの効果の4点について回答を求めた。その回答を用いてワードクラウド分析を実施し、その結果に基づいて内容分析を行った。

#### 4. 研究成果

##### （1）韓国語学習者の動機づけ変化

①結果：回答方法は6点尺度を採用した。調査で使用した59項目を16要因に分類した。記述統計結果を表1に示す。留学経験あり群となし群の比較では、「家族の影響」と「同化への恐れ」を除くと、事前・事後テストでは2群における平均値が全体的に高い傾向が示された。なかでも「目標言語のコミュニティに対する態度」は、留学経験あり群となし群の両群で、事前・事後テストの値には大きな差がなく、全ての平均値が5を上回っていた。留学経験あり群となし群、事前・事後テストの

表1 2群の記述統計結果

要因	留学経験あり群 (n=5)				留学経験なし群 (n=9)			
	事前テスト		事後テスト		事前テスト		事後テスト	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1 動機づけ	4.20	0.82	4.50	0.50	3.94	1.24	4.06	1.47
2 理想自己	4.12	0.67	4.28	0.93	3.64	1.15	3.18	0.90
3 義務的自己	3.80	0.61	3.20	1.45	3.33	0.91	2.89	1.19
4 家族の影響	3.15	1.24	2.90	0.80	2.44	1.12	2.83	1.18
5 道具的-接近	4.76	1.35	4.65	0.72	4.42	0.97	3.83	0.83
6 道具的-回避	4.40	1.38	4.45	0.96	4.00	0.87	3.72	0.49
7 言語学習に対する自信	4.80	0.77	5.07	0.92	4.85	0.82	4.63	1.21
8 韓国語学習に対する態度	5.20	1.02	4.85	0.65	4.25	1.02	4.31	0.93
9 海外旅行への志向性	3.93	0.83	4.67	0.97	4.44	0.85	4.22	1.24
10 同化への恐れ	2.44	0.80	2.08	0.94	1.91	0.66	2.31	0.80
11 韓国語に対する興味	5.13	1.07	5.00	0.41	4.48	1.30	4.48	1.20
12 韓国語使用への不安	4.60	0.95	4.10	1.13	4.25	0.93	4.36	0.65
13 統合的志向	5.13	0.51	5.20	0.77	4.81	1.30	4.59	1.09
14 文化に対する興味	4.87	0.77	5.07	0.92	4.81	1.21	4.74	1.04
15 目標言語のコミュニティに対する態度	5.40	0.65	5.30	0.54	5.19	0.89	5.06	0.85
16 留学に対する態度	5.50	0.71	5.10	0.82	5.00	1.32	4.22	1.56

比較を分散分析で検討した結果、全ての変数において有意な差は検出されなかった。さらに、事前・事後テストの平均値の差を検討した結果、「留学に対する態度」で有意な差異が認められ ( $t(13) = 3.12, p = .008$ )、事後において留学に対する態度が否定的になっていた。

②考察：以上の結果から、以下のことが明らかになった。

- ・学習者は入学以降、自身と同じような韓国や韓国語に関心がある学習者と過ごしてきたため、その関心を維持できたと考えられる。
- ・留学経験のない学生のなかには、授業が難しくなったり、ついていけなくなったりしたことが原因で、韓国語を使った将来の自分を想像できない学習者がいる。
- ・義務感や責任感ではなく、自分の意思で韓国語を学習している学習者が多い。
- ・留学への関心が低下した理由として、就職活動を控えていたことが考えられる。

##### （2）韓国語学習者の動機づけモデル

##### ①結果

記述統計の結果を表2に示す。平均値が高かった項目は、長期留学群では「目標言語のコミュニティに対する態度」で、留学経験なし群では「言語学習に対する自信」と「文化に対する興味」であった。一方、平均値が低かったのは、長期留学群では「義務的自己」「家族の影響」「同化への恐れ」で、留学なし群では「義務的自己」と「家族の影響」であった。

さらに、留学なし群と長期留学群の平均値の差を検討した結果、韓国語による日本語や日本人への影響を懸念した「同化への恐れ」において、留学なし群より長期留学群のほうが有意に低かった ( $t(26) = 2.86, p = .008$ )。5名のインタビューによるテキストデータを分析した結果、図1の概念図を作成した。

表2 3群の記述統計結果

要因	留学なし群 (n=22)		短期留学群 (n=2)		長期留学群 (n=6)	
	M	SD	M	SD	M	SD
	動機づけ	3.11	1.31	3.25	2.12	3.25
理想自己	2.96	1.14	2.80	1.98	3.17	2.17
義務的自己	2.44	1.29	2.17	1.65	2.22	1.17
家族の影響	2.28	1.42	1.88	1.24	1.67	0.98
道具的接近	3.19	1.00	2.50	2.12	3.80	1.91
道具的回避	3.17	1.06	4.00	0.71	3.04	1.33
言語学習に対する自信	4.56	1.34	5.00	1.41	4.44	1.60
韓国語学習に対する態度	3.69	1.32	4.75	1.06	3.38	2.14
海外旅行への志向	3.94	1.21	3.67	2.36	3.72	1.85
同化への恐れ	2.76	0.98	2.40	1.41	1.57	0.54
韓国語に対する興味	4.33	1.14	4.17	2.12	4.33	1.71
韓国語使用への不安	4.02	1.09	2.75	0.71	3.88	1.47
統合的志向	4.06	1.18	4.00	1.89	4.00	1.58
文化に対する興味	4.50	1.15	4.50	1.18	3.44	1.73
目標言語のコミュニティに対する態度	4.41	1.29	4.38	1.24	4.92	0.98
留学に対する態度	3.43	1.61	3.50	2.12	3.92	2.38

図1の概念図を作成した。

例えば、韓国語の《学習のきっかけ》の概念によると、自分の母親や友人などの《身近な人への共感》により《K-pop への関心》が高まったこと示す。

## ②考察

上記の結果から、以下の点が明らかになった。

- ・韓国語学習者は、韓国文化や韓国語に好意的な態度を持っている。
- ・学習者は身近にいる女性から影響を受け、韓国文化に関心を示すようになった。
- ・韓国語学習への関心が薄れ始めると、学習意欲を高める努力をしなくなる傾向が見られた。

### (3) 円卓シネマによる異文化理解教育

#### ①結果

韓国に対する態度尺度の記述統計結果では、好意的叙述に関する一般的な傾向として、「合理的価値判断を重視している」「人道的国家である」などの項目の平均値がほかの項目より高かった。一方、非好意的叙述では、「自国の非より他国の非を責める」や「独裁国家である」の項目で事前・事後の標準偏差が大きく、参加者の回答にばらつきが見られた。

韓国との接触経験尺度の結果によると、参加者4人のうち、韓国人の友人がいると回答したのは1人であった。また、全員が日韓交流イベントには参加したことはないが、韓国アイドルのコンサートやファンミーティングには参加したことがあると回答した。

韓国への関心尺度の記述統計結果によると、平均値が一番高かった項目は、「韓国についてもっと調べてみようと思った」( $M = 4.25, SD = 0.96$ )と「韓国社会への関心が深まった」( $M = 4.25, SD = 0.50$ )であった。

対話で参加者と教員が使用した特徴的な語彙とその指標値を表3に示す。参加者の発話では、K-popに関連した語「バンタン」「秋元康」「曲」、教員の発話では「沖縄」「中国」「朝鮮戦争」「チョコレート」などが抽出された。

さらに、参加者の発話のみをデータとしてワードクラウドを作成し、その結果を図2に示す。参加者の発言の特徴的なものを検討した結果、現代における韓国の大衆文化に関連した発言が多く見られた。

最後に、円卓シネマへの取り組みに対する自由記述回答の結果を、図3のワードクラウドで示す。名詞の特徴語として、「ディスカッション」「若者文化」「韓国の歴史」、動詞は「理解し合う」「出し合う」「歩み寄る」が挙げられた。

## ②考察

以上の結果から、まず参加者は自身が興味を示す特定のアイドルに対して応援する傾向が明らかになった。今回使用した映画では、参加者の歴史的事実に対する関心を高める効果は見られなかったが、韓国社会や文化への理解は深められた。

また、世代間によってマスメディアの入手媒体が異なることが原因で、参加者と教員による対話では話題のずれが生じたと考えられる。

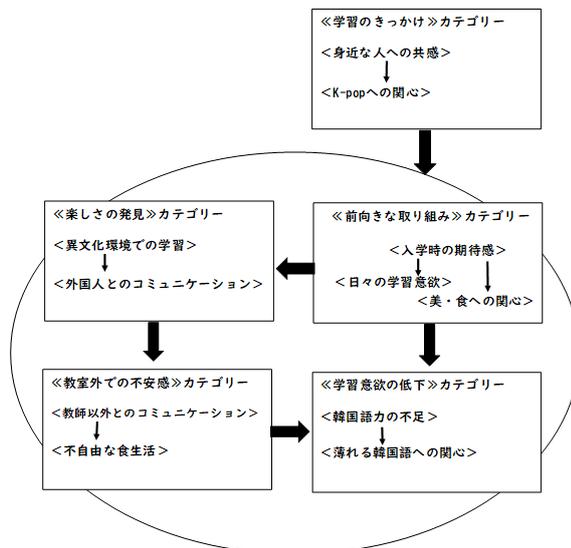


図1 韓国語学習の動機づけ概念図

表3 立場による特徴語の違い

	立場-学生-	指標値	立場-学生-	立場-教員-	指標値	立場-教員-
1	思う		18.190	いう		27.082
2	日本		9.701	国		7.421
3	感じ		8.943	皆さん		6.196
4	やる		8.867	そういうこと		5.507
5	言う		7.718	沖縄		5.507
6	妹		7.339	辺		5.431
7	行く		6.802	Kさん		4.819
8	自分		6.726	中国		4.819
9	やつ		6.575	映画		4.440
10	サクラ		5.810	1つ		4.130
11	バンタン		5.810	出る		4.130
12	秋元康		5.810	大変		4.130
13	友達		5.198	朝鮮戦争		4.130
14	そんな		4.358	ふう		3.442
15	荷物		4.358	シーン		3.442
16	韓国側		4.358	チョコレート		3.442
17	曲		4.358	釜山		3.442
18	見せる		4.358	南		3.442
19	世界		4.358	北		3.442
20	売る		4.358	人		3.372
21	普通		4.358			0.000

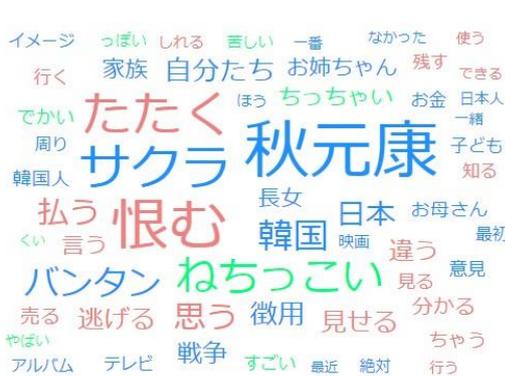


図2 ディスカッションにおける学生の発言

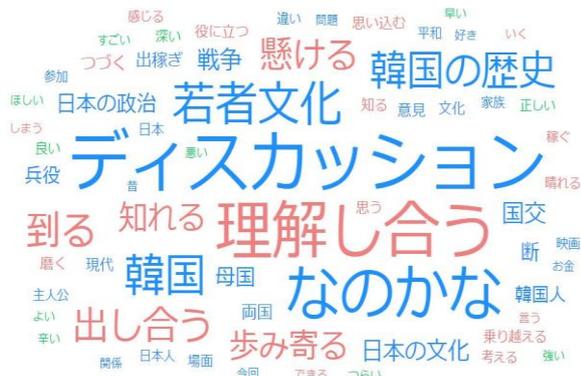


図3 ディスカッション後の振り返りの記述

#### (4) 韓国語学習者のビデオ活用効果

##### ①結果

自由記述回答では、参加者の使用文字数の合計は 1,625 字で、1 文に使用された平均文字数は 33.85 字であった。

1 年生の設問 1 から 3 の回答をまとめ、ワードクラウドで図 4 に示す。1 年生では「韓国語」という語以外では、「ペラペラ」(「ペラペラ」の入力ミスだと考えられるが)や「スムーズ」「聞き取りにくい」「聞き取れる」などの話し方 (delivery) に関する語が頻繁に使用されている。同様に、2 年生の設問 1 から 3 をまとめて、ワードクラウドで図 5 に示す。2 年生はスピーチ発表を 2 回実施しているため、「1 年」や「2 年」などの比較に関連した語の使用が見られた。また、「恥ずかしい」や「羨ましい」のような心的状態を表す形容詞も含まれていた。1 年次と 2 年次、留学経験者とそうでない学生の比較などについて言及した「成長」や「変化」という語も見られた。



図4 ワードクラウド分析の結果 (グループ1)



図5 ワードクラウド分析の結果 (グループ2)

「ビデオを使った振り返りによる効果」(設問 4) に対する回答を記述統計で分析したところ、5 段階評定でグループ 1 ( $M = 3.30$ ,  $SD = 0.48$ )、グループ 2 ( $M = 2.67$ ,  $SD = 0.82$ ) という結果であった。 $t$  検定を実施したところ、2 グループの平均値に有意な差は見られなかった ( $t(14) = 1.97$ ,  $p = .069$ )。

##### ②考察

学生のコメントを検討した結果、学生によるビデオ視聴は他者だけでなく自身の言語に対する気づきを高めること、学生が言語能力の変化を視聴覚的に観察できることが示された。2 時点でのスピーチが撮影され、学生がビデオを視聴したことによって、「成長した」と感じられただけでなく、ビデオで確認することで成長を確認できたと考えられる。ビデオ視聴は他者との比較だけでなく、学生の異なる 2 時点の比較、つまり、継時的比較 (temporal comparison) が起こり、自身の外国語によるパフォーマンスの成果を客観的に評価する機会となりうるものが期待される。

##### <引用文献>

- ① 伊藤哲司・山本登志哉 (2011). 『日韓傷ついた関係の修復：円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界 2』 北大路書房.
- ② 木下康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』 弘文堂.
- ③ 小林千穂 (2017). 短期留学の外国語学習モチベーションへの効果. 『天理大学学報』, 68, 1-19.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ	4. 巻 12
2. 論文標題 学習者の動機づけに関する予備的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 清泉女子大学言語研究所 言語教育研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24743/00001312	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ	4. 巻 15
2. 論文標題 韓国語学習者のスピーチビデオ活用の実践報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 清泉女子大学言語研究所 言語教育研究	6. 最初と最後の頁 準備中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田靖子	4. 巻 14
2. 論文標題 韓国語学習者の動機づけモデル：予備的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 清泉女子大学言語研究所 言語教育研究	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24743/00001444	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ	4. 巻 14
2. 論文標題 円卓シネマを通じた異文化理解教育の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 清泉女子大学言語研究所 言語教育研究	6. 最初と最後の頁 27 - 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24743/00001445	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 岡田靖子
2. 発表標題 韓国語学習者の動機づけモデル構築：予備的研究
3. 学会等名 日本心理学会 第85回大会（日本大学文理学部）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ
2. 発表標題 円卓シネマを通じた異文化理解の試み－韓国語学習者の場合
3. 学会等名 日本心理学会 第85回大会 ウェブ開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yasuko Okada, Takafumi Sawaumi, Takehiko Ito
2. 発表標題 Using speech videos of learners of Korean for pedagogical purposes in Japan
3. 学会等名 GLoCALL 2021 Virtual Conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ
2. 発表標題 日本人の韓国語学習者における動機づけ
3. 学会等名 日本心理学会 第84回大会（ウェブ開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Y. Okada, T. Sawaumi, & T. Ito
2. 発表標題 The effects of learner factors on maintaining academic motivation of EFL learners
3. 学会等名 HKCPD Hub Virtual International Conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	澤海 崇文 (Sawaumi Takafumi)  (60763349)	流通経済大学・社会学部・准教授  (32102)	
研究分担者	伊藤 武彦 (Ito Takehiko)  (60176344)	和光大学・現代人間学部・教授  (32688)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------